

辣な皮肉、「日本人らしい」
慎みとは無縁の、歯に物着
せぬ直言、さらには時に悪
戯の過ぎた毒舌、自在の揶
揄や冗談が「国際的」物議
を醸す折節もあった。「反
体制」ならぬ「反大勢」を
標榜して憚らぬ著者の「反
一大勢順応」の信条一心情
は、異端児ハーンに寄り添
う参与理解を旨とし、「復讐」に代えるに「和解」を
志向する。

ハーンが再話した「持田
の浦」の水子供養の怪異譚
は、漱石「夢十夜」第三夜
に「転生」した。今や通説
となったこの連鎖に、著者
はハーンが東京大学で講じ
たスコットランドのバラッ
ドを添わせる。「嬰兒殺し」
の記憶連鎖と罪障感の強迫
は祖霊信仰の普遍の原型性
を示唆する。異界婚や幽霊
譚は死霊との交情を紡ぎ出
す。だが霊界への回帰が狭
量な国粹主義に変性し、東
西の価値観に融和不可能な
対立を招くなら、それはハ
ーンが英語圏読者に伝えよ
うとした「日本発見」を裏
切る。「言霊の幸はふ国」
への夢想的陶醉とはハーン
は無縁、と著者は見る。

672頁に及ぶ刺激に満ち
たこの大著がこの先いかに
受容されるか。そこに「世
界文学」の将来を吟味する
うえでの試金石を認めたい。
本巻英語外文編は、十九
巻に及ぶ著作集の掉尾を
飾る。日本人による外国語
著述は、国内の文藝批評界
ではともすれば冷遇され、
政治的配慮から黙殺すらさ
れる。とかく打たれがちな
「出る杭」、その「脱腸」
の意義に敢えて拘泥した所
以である。

(了)

連載 237
「霊界・日本」との異婚譚は国際的相互理解にいかんに貢献するか? (下)

稲賀繁美

小泉八雲ことラフカディオ・ハーンへの「共感」を英語圏に向けて発信する使命感
—Sukehiro Hirakawa, Ghostly Japan as Seen by Lafcadio Hearn (本体一二〇〇〇円・勉誠出版)

京都精華大学教員・
放送大学客員教授

(承前) 本書はまず「民俗
学者」、文化人類学者、つ
いで「文筆藝術家」として
のハーンを描き、そこから
「日本解釈者」、最後に「神
道解釈者」ハーンへと展開
する。コロナ禍を奇貨とし
て自宅書斎に蟄居のうえ、
著者長年の海外での英語講
演を徹底的に再編集し、全
体通読にも耐える体裁に整
えた大著といってよい。

不平等条約下で日本に帰
化した文人・八雲は、アジ
ア太平洋戦争期以来、英語
圏の学界で酷評の対象とな
りながら、脱植民地主義の
時代に世界文学の地図が塗
り替えられるに伴い、思わ
ぬ復権を果たした。本書著
者は半世紀にわたりその渦
中で自らも毀誉褒貶に晒さ
れたが、その帰趨もまた、
文献学的社会学といってよ
い手法により自己解剖に及
んでいる。

各部の導入も簡明秀逸。
とりわけ著者はクリスティ
ナ・ロセッティの詩句の
「風」を頼りに、ギリシア
のπνεῦμαを神霊に託すハ
ーンの直観を解明する。こ
の着眼には、戦中派比較文学
者の遍歴に、海外での教場
経験が相乗する。足立節子
による巻末解説「禁忌を抱
きしめて」は、『敗北を抱
きしめて』に代表される主
流の「左翼系」北米日本学
者への違和感をも隠さぬ著
者のhartnäckigな姿を近傍
から捉えて、余すところがない。

「神道」に対する憎悪や
嘲笑が学術を動機づけ、蔑
視が称賛され酷評が歓迎さ
れる時代や社会環境に、ハ
ーン評価は久しく翻弄され
てきた。それに異を唱え、
detoxify the tabooを標榜す
る著者。その鋭い舌鋒や辛